

銀座の歌

與野野寛

我も行く春の銀座の灯のもとを
巴里の宵の
人(ひと)申(まを)として

銀座にて夜毎又逢ふと語るとき
銀座どほりも

新居格の来る

カフェエより扇形して春の夜の銀座の雪を照

すともしび

着きむれ酔ひて致へは片隅の卓たくにある身もお

もろきかな

灯もやは銀座通をまた行きぬ巴里に得たる

夜遊びの癖

夜ごと来て冷風の吹る奥の卓たく巴里をりせば

紐飾りせん

たちまちに春の銀座の宵の或るわかき導に入りて

擴がる

巴里にて金貨を投げて拂ひつるカフェエの夜には

似るべくも無し

灯のひかり煙草のけがり酒の香と水いろをして温

室に似る

猶注げとひくき聲一ぬ誰れ待ちて隅の卓ある

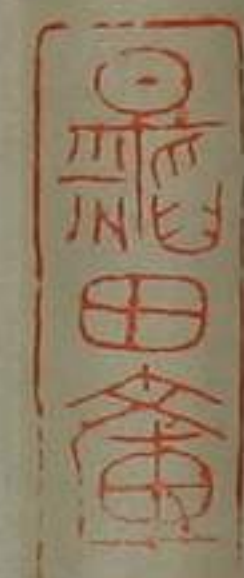
白きまき

項





與謝野寛銀座の歌



特別
文庫14
A108



與謝野寬筆銀座の歌



本
湖
久
雄
識

